

# フィールドワーク[希望学] 東京大学社会科学研究所

## 第3回 釜石のタカノリさん

「釜石にね、私みたいな、こーんな馬鹿者いないですよ、先生。親父から一度ほど勘当されかかったんですけど」。釜石でベンチャー企業を営むタカノリさんは人懐っこい笑顔を見せながら私にそう言う。「でもね、これだと思ったらもう止まらないですよ。親父が泣こうが、お袋が泣こうが、誰の言うことも聞かない」。タカノリさんの波瀾万丈の物語は十八年前にさかのぼる。

【希望】タカノリさんは仙台の大学を出て、大手のセメント会社に勤めた。十年勤めたところで「親父に連れ戻される」。ちょうど、新日鉄釜石製鉄所の高炉の火が消え、街全体が沈みきっていた時のことである。

「親父」が連れ戻したのは、自らが経営する生コン会社を継がせるためである。でも、「黙って言うことを聞くだけではつまらなくて」。なにか、自分で新しいこと、それも衰退していく釜石のためになることを始めたかった。

タカノリさんが目を付けたのは、未利用のまま大量に捨てられていく水産物のくずだった。ワカメやコンブの切れ端、製品に加工する際に出る煮汁、サケの皮や骨などである。これらを使って、何か付加価値の高いものが作れないだろうか。タカノリさんの胸に、ぼつんと小さな希望の灯りがともった。

【始動】タカノリさんは経済学部出身である。だから、水産物関係の科学的知識があったわけではない。セメント会社での勤務経験が役に立つはずもない。

だから、タカノリさんは情報を収集することから始めた。ものすごい勢いで、水産関係、食品関係の学会誌を取り寄せ、水産物資源の利用についての論文が掲載されていれば、それを読む。ついで学会の聴講。学会が開催されると知れば、勝手に行って（もちろん、参加費を支払って）、面白そうな、自分のアイデアと関連のありそうな報告を聴く。

そればかりではない。当時の通産省が仙台や東京で開いていたユビビジネスの研究会にも、中小企業大学校が主催する勉強会にも出席する。

この行動力には私もびびくりする。「どうせ、会社にいたってやることがないので、そんなのばかり聞きに行っていた。ただ待っているだけでは、何も始まりはしない。こつした積み重ねがあつて、水産物のくずを「エキスミたいなものにすればいいのかなあ」というイメージが浮かんできた。

【実現】そんな時、東北大学農学部の研究室が、カマボコを生産するときに出るくずをいかに利用するかを懸命に研究していることを知る。さっそく共同研究を申し入れる。お金はいえ、ば、「親父」に出してもらおう。

釜石に連れ戻されて一年後、共同研究の成果が実り、タカノリさんは会社を設立する。サケなどの魚の残滓から旨味調味料（魚醤）を生産する会社である。化学調味料ではなく、天然素材から作った調味料。私も釜石で購入したが、魚臭がなく、味が引き立つスグレものである。先日は、半ダースも買ってしまった。

肉まん、即席ラーメンのスープ、佃煮、冷凍食品、カレーのルーなどに、こつそりと入っている。有名ラーメン店も使っている。隠れたヒット商品なのである。

【挫折】会社設立から五年間はまさに順風満帆。だが、不幸は突如として襲ってくる。しかも二つも。

まず、取引先の大手メーカーに技術を盗まれた。取引も当然、打ち切られる。その影響で、順調だった売り上げにも陰りが見え始める。そこに追い打ちをかけるように、詐欺にやられる。被害金額五千万円。仕上げは主要取引先の倒産である。被害総額数億円。

タカノリさんには何の落ち度もないと私は思う。人をだます方が悪いに決まっている。主要取引先の倒産だってバブルの時に調子に乗って投資したからだ。

だが、タカノリさんの会社は、この不幸を乗り切ることができず、裁判所に和議を申請することになった。

【支え】申請は債権者に認められ、タカノリさんは借金の一部を免除してもらって、会社の再建に取り組みことになった。債権者も私と同じ気持ちだったのだろう。さすがのタカノリさんも、この時ばかりは、かなり落ち込んだ。

そんな時、若い社員たちはこう言った。「社長が止めるならば止めるけれど、あきらめないで、もう一回やりましょうよ」

【飛躍】あと少して、再建が終わるところまで来た。タカノリさんも頑張ったのだ。それだけではない。同じ技術を使って、同じ水産物のくずから、より高付加価値の製品、コンドイチンなどの機能性食品の生産に成功した。さらなる飛躍である。

「棚ぼたというのではないですから。動いて、もがいているうちに何かに突き当たる」。同じく釜石で頑張っているフルハシさんの言葉である。

（東京大学社会科学研究所教授 中村圭介）

※東京大学社会科学研究所が進める希望学プロジェクトでは「社会における希望の変遷」をテーマに、製鉄の町、ラクビーの町として知られた岩手県釜石市において本格的なフィールドワークを実施している。法学、政治学、経済学、歴史学、社会学といった様々な学問領域から、釜石における「希望」の過去、現在、未来を市民や出身者の方々の協力と応援を得て、研究中である。



近代日本の産業発展とその後の展開が集約的な形で現れている岩手県釜石市  
撮影:東京大学社会科学研究所研究機関研究員 大堀 研